



# OBRIDGE

オブリッジ

わかちあい  
 共生のまちづくりに向けて



**第3号**  
 平成20年度版  
 Gunma University



## CONTENTS

<ul style="list-style-type: none"> <li>・「多文化共生教育・研究プロジェクト」が目指す人材育成 .....2ページ                  ——座談会:PCDCと人材育成</li> <li>・「多文化共生教育・研究プロジェクト」2005-2008 .....6ページ                  ——プロジェクトの歩み</li> <li>・アメリカ・ブラジル・スウェーデン・日本の事例から                  多文化共生社会づくりに貢献する人材の育成を考える .....8ページ</li> <li>・学生たちは何を学び、考え、行動したのか .....10ページ</li> <li>・Let's start! 多文化共生 .....14ページ                  ——特色GPの志を受け継ぐ1・2年生たち</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プロジェクト・トピックス .....16ページ                  ——「多文化共生教育・研究プロジェクト」に参加する学生たち</li> <li>・群馬大学におけるPCDCのインパクト .....22ページ                  ——成果と可能性を探る・1</li> <li>・群馬大学モデルの社会へのインパクトと期待 .....24ページ                  ——成果と可能性を探る・2</li> <li>・PCDCの可能性を語る .....26ページ</li> <li>・私たちのメッセージ「共に生きる青い星」 .....27ページ</li> </ul>
---	---

# 「多文化共生教育・研究プロジェクト」 が目指す人材育成



左から木村さん、安藤さん、黒澤さん、白井副学長、白石さん、橋本さん

## 「参加してなかったら、いまの自分はない」

特色GPに採択されて4年。PCDC（群馬大学「多文化共生教育・研究プロジェクト」）の活動は、いま大きな注目を集めています。カリキュラムや学生たちの校外活動の充実ぶりから生まれる人材育成の可能性は？プロジェクトの推進室長・白井紘行副学長と卒業を迎えるメンバー3人と卒業して社会で活躍を始めた卒業生2人に話を聞いた。

協働？リーダーシップ？PCDCにどっぷり浸かって見えてくるものは？

白井 PCDCに携わってきた中で、最も印象的な活動はどのようなものですか。

木村 2年生から始め3年間活動しましたが、一番印象に残っているのは「Dosa」。2年生が初めて自分たちの力で現場を回るものでした。また、教員研修連続ワークショップではリーダーを務め、企画や運営のお手伝いなどをやりながら、みんなと協力してつくり上げていく醍醐味を知りました。

安藤 1年生から4年間活動に携わりました。多文化共生シンポジウムでは、初めてパネル展のリーダーを経験。いろいろなチームと連絡を取り合い、パネルの構成を考える。初のリーダー役ということと、とても印象に残っています。

黒澤 2年の時から始めて3年。大学2年の時に参加した横浜・新宿方面へのフィールドワークが、最もインパクトがあります。自分で歩いて街の様子を見ようという企画でした。ある不動産さんの方に「外国の人もいらっしやいますか？」などと伺ったところ、「日本人よりいいよ。外国人の方がしつかりしていて、良い人たちだよ」と怒られてしまいました。苦い思い出でもあるのですが、「現場の人の生の声を聞くという

のはこういうことなんだろうな」と実感できましたね。

**白井** 「Dosa」というのは、初めて聞く人にはよく分からない。具体的な活動内容は？

**黒澤** 「Dosa」とは「多文化共生教育実践巡回プロジェクト」の通称「どさ回り」のことで、自分たちで遊びや授業内容を考えて、幼稚園や児童館に行つて、教える活動です。どういった子どもを教えるのかによって、教え方、伝え方、話し方が変わってくる。臨機応変に対応したり、相手に合わせて働きかけたり、私たち同士がどうやって協働していくかということが活動の重要なポイントになります。

**白井** 「どさ回り」というからには、あちこちに飛び込むわけ？

**黒澤** 一応アポは取りますが、飛び込みに近い感じです。

**白井** それじゃ、企業に入社して営業でもやっていけそうだな(笑)。

**白石** 平成19年度に卒業し、現在、前橋市立宮城小学校で2年生の担任をしています。PCDCは大学2年生から卒業まで3年間の活動で、一番最初にやった活動が「Dosa」。私たちの学年はメンバーが12人と、例年に比べても多かった。大人数で一つの活動をする時に、意見交換さえも最初はぶつかったり、情報の共有ができなかったり困難の連続でした。手探り状態の中、問題は多かったものの、

なんとか自分たちの力で実践したことが記憶に鮮明に残っていますね。

**橋本** 平成17年度に社会情報学部を卒業し社会人になって3年。今は(株)ミツバで営業として働いています。PCDCに入ったのは、大学3年の夏で、一年半と実質的には短い活動。大学4年の夏に参加した多文化共生インターンシップは忘れることのできない経験です。私の配属は、外国籍の子どもが多い大泉町の保育園。保育園に一人で行つて、小さい子どもも外国籍の子どもと交わり、自分の学ぶ専門分野とは違う分野で就業体験できたことは印象深いです。

### 一歩踏み出す勇氣を持って PCDCへ

**白井** 皆さんは、どういった理由からPCDCの活動に飛び込んでいったのでしょうか？ それから参加した意味などは？

**橋本** 多文化共生プロジェクトの存在自体知らなかった。インタビュアー、写真、編集などといった取材活動に興味があつて友だちに話したら、その友だちがもともとPCDCに参加していた。「じゃ、ちよつと来てみるか」ということで、一緒に結城先生のところに来ていかれ、その場で「よく来たね」とハグをされまして(笑)。その時点で「小鳥遊への参加が決

定したわけです。

**白井** その時の気持ちは？

**橋本** 「こりゃ、やるしかないな」と思いました。実際に活動していく中で非常に得るものが大きかった。多文化共生に関する問題意識が持てたことはもちろん、活動を通して多様な人と出会うことができました。

**白石** 教育学部2年生には体験的科目というカリキュラムがあり、その一つとしてフレンドシップがあります。フレンドシップに入っている部活の先輩が荒牧の学食の前で、みんなで紫のはっぴを着てワイワイやっているのを目にしたことがあつたのです。フレンドシップの説明会で写真が張つてあるのを見て「あ、この活動だったんだ！」と知り、「楽しそうだな」と思いましたね。また、私は群馬に住んでいるにもかかわらず、大泉が外国人集住地域だということを知らなかった。それが新鮮で、興味深く、参加を決意しました。

**黒澤** 授業の説明会で、結城先生のおふれるパワーとエネルギーに触れ、「私もこんなすてきなエネルギーのある人になりたいな」とあこがれたのです。また、一人ではできなくても協力すればできるという協働という言葉に耳にするけれど、自分では未体験。実際にやってみたいなと思いました。

**安藤** 一言で言うくと、好奇心。サークルなどは、いま一つ自分には

合わない。その時、友人の紹介で「小鳥遊」というチームを見に行きました。仲間の濃さ、元気さ、面白さに衝撃を受けたんですね。多文化共生のことを考えたのは入つてから。太田に住んでいるから、大泉に外国籍の人が多くことは知っていました。それ以上のことを知ろうとしていなかったのです。そういう意味で、この活動はいいきっかけになりました。

**木村** 1年生の時に結城先生による「学生のための仕事術」という授業に参加。PCDCの活動は、その授業の中で説明がありました。その時は勇氣がなくて参加できなかったんです。2年生の時の体験的科目というカリキュラムがあり、PCDCの先輩から話を聞き決意しました。大学の授業というのは、机に向かって先生の話を聞くことが多い。PCDCなら大泉や太田といった街に出て、自分で実践して学ぶことができる。それが魅力的でした。



多文化の中でやっていく自信が芽生えた

**白井** 多文化共生について継続的な活動を行うのは難しいと言われています。活動に学生が数多く参加しているということと、カリキュラムの中に多文化関連の科目を系統的に組み込む。この二つが本学の大きな特徴であり、継続性を維持している理由です。皆さんはそういった環境の中で活動を続けてきたわけですが、今後、異文化、多文化の中で違和感なく溶け込み活動していけると思えますか？

**橋本** 初めて大泉を訪れた時、衝撃を受けました。私が暮らしてきたところとは、街並みがまったく違う。ポルトガル語の看板、街行く外国人。「ここは日本か」と。約一年半くらい活動をして、抵抗感はなくなりましたね。会社も製



「多文化共生教育・研究プロジェクト」推進室長を務める白井紘行・群馬大学理事（企画・教学担当）・副学長

造業ですから外国人と接する機会も多く、世界を相手に仕事をしていかなければいけない。徐々にではあるけれども、意識は変わりつつあります。

**白石** 仕事場所が前橋ということもあり、生活の中で多文化を意識しているかというやや薄れてはきている。でも、例えばクラスの中に外国籍の子がいたときに、受け入れる余裕や意識が自分の中にできているかどうか。この活動をしたからこそ、大泉町のようなところが当たり前になると認識できる自分がいる。PCDCの活動をせず、そのまま生活していたらその存在すら知らないままだったはず。

**白井** 少子高齢化が進み、インドネシアはじめ他国から介護福祉士の卵なども来るような時代が到来します。学生の立場で、多文化地



白石夏紀  
富岡市出身。2008年、教育学部教育心理専攻を卒業。現在、前橋市立宮城小で教員を務める。PCDC活動歴3年。

域で活動し、心に残ったことはありますか？

**黒澤** 4年生の夏休みにやった写真教室で出会った子どもたちは日本語がほとんど話せない。先生は「一生懸命に教えてね」と言っけれども、「何を教えたらいいのかわからない。ただぼうぜんとして立ち尽くすのみ。そんな状況の中でも「言葉が分からなくても、とにかく歩み寄ってあげばなんとかなるんだな」ということを多文化共生という問題を通して学んだ気がします。

**木村** 実際、接してみると日本の子どもたちと外国籍の子どもたちはまったく同じ。言葉が通じなくても、絵を描いたり遊んだり楽しんだりというのはまったく変わらない。勝手に「外国籍の人は違う人」という先入観を今までずっと



橋本貴至  
栃木県大平町出身。2006年、社会情報学部社会情報学科卒業。(株)ミツバに入社し、営業に携わっている。PCDC活動歴1年半。

持ってきたのが、活動を通して切り崩されていった。壁をつくる必要はない。活動できたからこそ、そういう気持ちになったはずですよ。

企業や商店街の人たちにも交流を広げては？

**白井** 社会に出てPCDCの活動が役に立つのかどうか。

**橋本** 単純に言つと、度胸がつく。どんな場面でも自分が何をすべきか考えて、いろいろな人に協力を求めて何か自分ができることを見つけていくというような土台ができたのかなと思っていますね。これから海外で仕事をできる可能性があるんですね。この活動が今後、生かされるのではないかと思っています。

**白石** 活動ごとに役割を決め、準



黒澤朝子  
前橋市出身。教育学部国語専攻4年。卒業後は、横浜国立大学大学院に進学。将来の目標は、中学校教員。PCDC活動歴3年。



安藤拓哉  
太田市出身。社会情報学部情報社会学科4年。足利銀行に入社予定。PCDC活動歴4年。



木村囀子  
前橋市出身。教育学部家政専攻4年。将来の目標は小学校の教員。PCDC活動歴3年。

備をして当日のイベントを迎えるというプロセスが、PCDCでは数多い。その中で求められていた「自分は何をすればいいのかわからない」と考えながら、積み重ねてきたことが、毎週のようにある学校行事や学年単位の小イベントなどにも生きています。

**白井** いままでやってきた活動の内容とか方向性について思うところはありませんか？

**木村** 連続して1カ月に1回などと同じ活動を継続すると、もっと深く意識して周囲を見渡せるのではないかと思います。

**安藤** 今回の赤城キャンプでは初めて企業の方を講師として迎え、そのお話にすごく刺激を受けました。これから多文化共生をやっていく中で、いろいろな企業とかかわりができると面白いと思います。

**黒澤** 市役所や学校関係者など、

もともと多文化共生に熱心な人たちとともに活動する機会が多かったのです。これからは商店街の方など一見、多文化とかかわりがないと思える地域の人々と一緒に活動していけたら面白いと思います。

**社会人基礎力から学士力へ**

**白井** PCDCは「社会人基礎力」をつけるのに最適な活動と言われってきたが、最近、文部科学省は「学士力」という言葉を使い出しています。学士力とは「学士課程で育成する21世紀型市民に対して、日本の大学が保証すべき能力」。学士力はいくつかのカテゴリーからなり、初めに出てくる「知識理解」の中に「多文化異文化の理解」という項目が真っ先に書かれている。それから、汎用的技能、態度指向性、創造的思考力といった、

ほぼすべてのカテゴリーがPCDC活動で養われると思っています。皆さんは、PCDCの活動を今後、どう生かしていきたいですか？

**安藤** 人と出会って楽しさを知った。今までは、人見知りの部分があったが、活動を通して少しは改善された。就職先は銀行ですが、融資や窓口業務では、多文化のお客さんと接する機会も多いでしょう。PCDCを経験しているとならないで全然対応が違ってくるのではないのでしょうか。

**黒澤** 協働をちょっと広げて、人を巻き込んで働く力、人に甘える力を発揮していきたいと思っています。結城先生と一緒に視察したロサンゼルス市警では、高校の先生や保護者を巻き込んで一緒に活動してチームで非行問題解決に取り組んでいた。私は中学校の教員になりたいと思っていますが、さまざまな問題を学校だけで抱え

ず、いろいろな人の力を借りて柔軟に対応していけたら良いな、と思っています。

**白石** PCDCの活動を思い出して、「あの時は大変だと思いつながらやってたけど、それが今になつてきているな」と、今になって納得できるところがある。これからの長い社会人生活に生かしていきたい。

**橋本** PCDCから離れて3年、日々の仕事に追われ、少し視野が狭まっている自分を感じています。今回、現役の学生さんたちから刺激をもらった。仕事の分野だけでなく、その他の世界にも目を向けていきたいなと、あらためてスタートしていこうかなと思います。

**白井** PCDCで学んだことを基礎に、どんどん幅をひろげて活躍してください。

# 「多文化共生教育・研究プロジェクト」 平成17-20年度(2005-2008)

## プロジェクト・ヒストリー

PCDCの歴史がスタートしたのは、平成10年度。大泉町をはじめとする多文化地域の教育問題への本格的な取り組みに着手。まず、学長裁量経費として「国際理解教育に関する教員養成カリキュラム開発のための基盤調査」を実施。平成11年度には、教育学部附属「教育実践研究指導センター」を「学校教育臨床総合センター」に改組し、異文化間教育の専任教員を配置した。

平成11年度からは教員養成学部フレンドシップ事業の取り組みの一つとして、「日本語を母語としない児童生徒への教育」「多文化共生教育」をテーマに、多文化地域の学校に対応できる総合的・実践的指導力の育成に取り組んだ。

平成13年度に、群馬大学教育改善推進費による「多文化共生研究プロジェクト」を発足させ、全学横断的なプロジェクトへと拡大。

平成14～16年度には文部科学省地域貢献特別支援事業として選定を受け、実態調査、教育事業、医療事業、交流事業、防災事業、人材育成、情報提供、施策提言の8領域にわたる、延べ56事業を企画・実施した。

こうした実績のもと、国公立大学が行っている教育の取り



多文化共生シンポジウム  
平成20年11月29・30日に大泉町文化むらで開催した国際シンポジウムを含め、これまで9回実施している。学生の活動報告や国内外から専門家を招いてのパネルディスカッションを行う。運営も学生が担当



特設公開講座  
さまざまなジャンルで活躍している方々を講師に迎えて開催。平成19年度には、9回シリーズで実施。写真は「ブラジル伝統格闘技 カポエイラを通してブラジルの文化を知ろう」

### 平成17(2005)年度

5月 第1回多文化共生支援者養成講座(平成17年度は8回開催)  
8月 特色GPに採択される  
9月 第2回多文化共生インタナショナルシンポジウム  
10月 第3回地域貢献活動学生協力者養成講座  
11月 テクノドリムツアー(ブラジル人学校ピタゴラスの児童・生徒を案内)  
3月 広報誌Orion第4号発行

- 「多文化共生のためのブラジル学」を新しく開講 講師はアンジェロ・イシ先生
- 多文化地域のフィールドワーク 浜松
- 第4回在日外国人学校児童生徒等健康診断
- 地域貢献学生情報交換会(群馬大学・一橋大学)第1回目
- 「多文化共生教育・研究プロジェクト」推進室会議「多文化共生教育・研究プロジェクト」教育学部推進グループ会議、地域協働ネットワーク連絡会議、評価会議の開催
- 第6回「多文化共生シンポジウム」協働で築く地域防災 ～多文化共生時代に求められる人材育成のために～
- 第4回在日外国人学校児童生徒等健康相談会

### 平成18(2006)年度

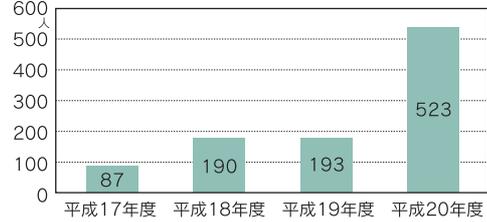
4月 「ポルトガル語講座」を新しく開講 講師は伊勢島セリア明美先生  
8月 教養教育科目「多文化共生社会を考える」新規開講  
9月 第3回多文化共生インタナショナルシンポジウム  
11月 第4回地域貢献活動学生協力者養成講座  
12月 特設公開講座を開講(平成18年度は6回開催)

- 第7回「多文化共生シンポジウム」 まちに飛び出すわがものたち～大学・地域の協働活動で学生はどう育つか～
- 多文化地域のフィールドワーク 成田・新宿・横浜
- 第5回在日外国人学校児童生徒等健康診断
- 第5回在日外国人学校児童生徒等健康相談会
- ORIBIDGE創刊
- 広報誌Orion第5号発行

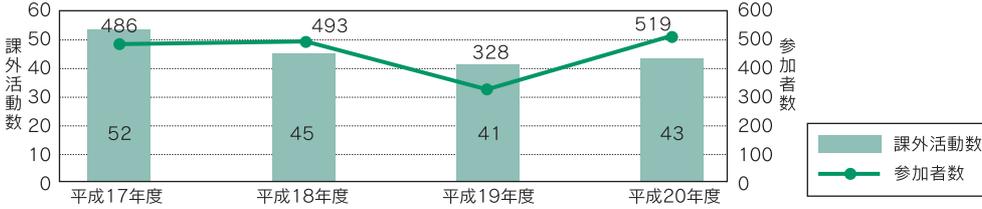
■「多文化共生シンポジウム」■

	タイトル	会場
平成17年度 第6回	協働で築く地域防災	群馬県庁舎2階 ビジターセンター
平成18年度 第7回	まちに飛び出すわかものたち	群馬県女性会館 2階ホール
平成19年度 第8回	学生たちの実践から考える 多文化共生時代の教育・防災・医療・防犯	群馬大学荒牧キャンパス 学生会館ミューズホール
平成20年度 第9回	多文化共生社会づくりに貢献する人材を育成する	大泉町文化むら大ホール

■「多文化共生シンポジウム」参加者数■



■ PCDC課外活動数と参加者数 ■



地域貢献活動学生協力者養成講座  
この講座では、学生が地域でボランティアとして活躍するのに求められる知識・技能・心構えを習得する。第4回からは一橋大学の学生と合同で行い、第6回目となる平成20年度は、グループに分かれ、課題抽出から協働解決へとというプロセスを経験した。

組みのうち、特色ある優れた取り組みを重点的に支援する文部科学省の特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）に、本学の「多文化共生社会の構築に貢献する人材の育成 地域協働ネットワークを活用した専門的職業人の育成」が平成17年度に採択され、平成20年度がその最終年度となった。

早期から大泉町や群馬県といった行政や地域と連携を重ねたことがプロジェクトの大きな特徴の一つだ。この4年間、多文化地域で活躍できる「共生マイナード」をもったプロフェッショナル（教員・医師・看護師・エンジニア・行政関係者・起業家等）を育成していこうというプロジェクトに、181事業、3579人の学生が参加。多くの学生たちが、地域へ飛び出していった。



フィールドワーク  
外国籍住民の生活環境や教育環境を現地で体感するフィールドワークは、学生が大きく成長するチャンス。平成18年度は成田・新宿・横浜等で2泊3日を実施



推進室会議  
全学横断組織である「多文化共生教育・研究プロジェクト」推進室には全ての学部・全ての関連事務組織から教職員が集まり、実施計画や運営を話し合う

平成20(2008)年度

- 4月 教養教育科目「多文化共生のための日本語」新規開講
- 4月 「子ども目で見える世界の理解」ワークショップ開催
- 5月 特設公開講座を開講(平成20年度は4回開催)
- 8月 第5回多文化共生インターンシップ
- 9月 第6回地域貢献活動学生協力者養成講座
- 10月 教育カリキュラム体系化のための国外調査・連携打ち合わせ(アメリカサンゼルス)
- 11月 第9回「多文化共生シンポジウム(国際シンポジウム)」
- 2月 「多文化共生社会づくりに貢献する人材を育成する」
- 2月 「アメリカ・ブラジル・スウェーデン・日本の事例から群馬大学の取組をふりかえる」
- 3月 平成20年度「学生ボランティア助成事業」採択 群馬大学「みらい」分野(地域連携・交流)
- 3月 第7回在日外国人学校児童生徒等健康相談会
- 3月 第7回在日外国人学校児童生徒等健康相談会
- 3月 OBRIDGE第3号発行

平成19(2007)年度

- 4月 専門科目「多文化共生時代の教育を考える」新規開講
- 4月 教養教育科目「多文化共生のためのアジア学」新規開講
- 6月 特設公開講座を開講(平成19年度は9回開催)
- 6月 第1回は「21世の日本と国際教育の視点」がテーマ
- 8月 講師は文部科学省初等中等教育局国際教育課長(当時)の手塚義雅氏
- 8月 第4回多文化共生インターンシップ
- 9月 第5回地域貢献活動学生協力者養成講座
- 11月 平成19年度「学生ボランティア助成事業」採択 群馬大学「ここからいふ」(分野「国際」)
- 2月 第8回「多文化共生シンポジウム」
- 2月 学生たちの実践から考える共生時代の教育・防災・医療・防犯
- 3月 第6回在日外国人学校児童生徒等健康相談会
- 3月 第6回在日外国人学校児童生徒等健康相談会
- 3月 OBRIDGE第2号発行

# アメリカ・ブラジル・スウェーデン・日本の事例から 多文化共生社会づくりに貢献する人材の育成を考える。

—第9回多文化共生シンポジウム（平成20年11月29日～30日開催）に参加したパネリストのみなさんの声から—

日本人のブラジル移民から100年。移民たちは経済的に困窮する中であつても、力を合わせて学校をつくるなど子どもたちの教育には力を惜しまなかつた。移民から25年目には初めてサンパウロ大に入学生を出し、今や学生の15%、教員の8%を占めるほど。ブラジル全体で日系人が0.7%に過ぎないことを考えれば、その教育熱心ぶりがうかがえる。トップクラスの富裕層に上り詰めた日系人こそいないものの、さまざまなジャンルに人材を輩出しているのだ。

一方、日本国内には現在、約30万人のブラジル人が滞在している。子どもの教育に対する意識は家庭によって温度差があるが、日本の大学を卒業する者も増えつつある。大学教授、シヨップオーナー、企業経営など成功者も徐々に見られるようになった。

私は、現在日本に在住するブラジル人30万人のうち20万人ほどは将来ブラジルに帰国すると予測している。彼らが日本社会の文化や考え方を持ち帰ったら、それはブラジルの日系社会にとつてかけがえのない財産となるはず。

また、日本を選択した子どもたちがブラジル文化を根付かせていけば、それは日本社会の活性化にもつながるだろう。私は、こうした絆の強化に大きな期待を抱いている。

そのためには日伯両国で子どもたちの教育を支えるパートナーシップの構築が必要となる。これまでも群馬大学は教育・医療・防災・防犯といった側面からブラジル人の子女を支援してきた。これまで以上に群馬大学とはパートナーシップを強固なものにし、日伯両国の人材育成を進めていきたい。

将来その多くが専門職として活躍する群馬大學生、「多文化共生教育・研究プロジェクト」のスピリッツを忘れず、地方都市に芽生えた多文化共生の息吹を生かして欲しい。

## 日伯両国を活性化するためにはパートナーシップ強化を

二宮正人 氏

5歳の時ブラジルに移住、現在は帰化しブラジル人となる。サンパウロ大学卒業後、東京大学大学院法政学研究所博士課程修了。現在、サンパウロ大学法学部教授、CIATE国外就労者情報援護センター理事長を務める。



## 日本、アメリカ、スウェーデンの 移民教育はなぜ異なるのか？

Apichai W. Shipper 氏

コーネル大学卒業。マサチューセッツ工科大学政治学博士号。東京大学、一橋大学、ハーバード大学、ストックホルム大学での在外研究を行う。現在、南カリフォルニア大学国際関係学部助教授を務める。



これまで一時的労働者としてのみ移民を受け入れてきた日本。潜在的な市民として認識して同化主義を取ってきたアメリカ。多文化主義の下、自由と平等を基本にするスウェーデン。移民政策や移民教育政策は、政治的な神話や人間性についての哲学的伝統に基づいて大きく異なるものだと思う。

アメリカやスウェーデンでは、外国人居住者に対して社会的・経済的にある程度の権限が与えられ、永住権の取得や帰化が比較的容易だ。日本では、制限が多く難しい。

日本では天照大神神話に基づいてさまざまな概念が形成されているように思われる。エリート層は、純潔性と血統に重点を置き、階層的な人間性を強調する。

一方、アメリカでは、独立宣言やトーマス・ジエファソン、アブラハム・リンカーン、マーティン・ルーサー・キング牧師らが言うように、「すべての人間は平等である」という概念が根幹をなす。また、スウェーデンでは、「すべての人間が中庸を保ち、平等で相互理解の下に、人間の家がつくられている」という概念に基づき多文化政策がとられている。

米国の公立学校では移民を社会に同化させるよう仕向ける一方、各民族や宗教による民族学校もあつて週末開校されている。これは子どもたちへの負担が非常に大きい。

スウェーデンでは人種間の違いを政府が尊重し、公立学校に通う子どもたちに母国語と歴史・文化を学ぶ機会を平等に与える。

日本では例えばブラジル人集住地域の自治体のみで母国語教育を提供するなど日系民族の優遇が問題ではないか。

地方都市などに暮らす一般の人々には多文化社会に抵抗がないが、エリート層は恐れを抱いていると思う。多文化共生社会の到来を前に日本には大きな変革が求められる。

外国人学校（ブラジル、ペルー）児童・生徒の健康診断、健康相談会に、医療・保健チームの立場からかわり出したのは平成14年度のことだった。私は現場での診察に携わってきただけだったが、結城先生、佐藤先生が中心となって全体の計画、調整、設営、診察、通訳の依頼、啓発ポスター作り等々、壮大なプロジェクトとなった。教員、学生ボランティア、自治体や地域の人々、そして学校の先生方など通常の健診と比べてはるかに多くの人員を動員した。

この6年間に、親たちの意識も向上し、子どもたちの歯の状態が年々改善されるなど、効果的なプロジェクトとなった。

このプロジェクトをさらに発展させ、日本における多文化共生社会の規範づくりを行っていかねば、と思う。そのためには各分野における若い人材の育成が急務である。

子どもたちの健康診断を通じて、診療という短い場面でも相手との文化の差異を感じるが多かった。これを当然のこととして受け入れる力と語学力は最重要だろう。

多文化共生社会には、もちろん文化的な摩擦がつきもの。業務をうまく遂行できる人材には高いコミュニケーション能力と相手の文化に対する深い理解が何よりも求められる。人材育成には明確な目標が必要となるだろう。使命感、包容力、向学心、忍耐力……。十分な基礎知識を身につけた上での現場主義が望まれる。

人材を育成するには、外国人が気軽に参加できるような魅力的なプロジェクトを多数企画し、多くの若い人材が参加できる場が必要となる。

こうした人材育成やプロジェクトを成し遂げるには公的な資金援助が不可欠なのではないか。将来に対する予防注射だと思ってコストを投下すべきだと思っている。

## 医療・保健チームの立場から見た多文化共生社会の人材育成

田村 遵一 教授

高崎市出身。群馬大学医学部卒業、群馬大学医学部附属病院勤務後、米国国立フォロニア州立大学ロングビーチ校、UCLAロサンゼルス校大学院で刑事司法および公共政策について学び、現在、ロサンゼルス市警察本部副本部長。



## 多文化コミュニティで成果を上げる警察の評価体系

Terry S.Hara 氏

ロングビーチシティカレッジ卒業。ロサンゼルス市警察に28年間勤務。カリフォルニア州立大学ロングビーチ校、UCLAロサンゼルス校大学院で刑事司法および公共政策について学び、現在、ロサンゼルス市警察本部副本部長。

警察は多文化社会と積極的なパートナーシップを築くことで、大きな効果を上げることが出来る。出発点は、「信頼」という言葉だった。犯罪率の上昇は警察の責任で、どう対応していくのか考えるところから始めなければならない。その上でコミュニティの人にかかわってもらうことが重要だ。そのため、ロス市警では多様なプロジェクトを用意してきた。

月に一度コミュニティの人々が警察担当者と会って双方向に情報交換を行うコミュニティ・アドバイザリー・ボード。コミュニティの人々に警察のサービス、複雑な仕組みを理解してもらうためのコミュニティ・ポリス・アカデミー。コミュニティ側から警察に対して情報提供してもらいコミュニティが抱える多様な問題を話し合うコミュニティ・オリエンテーション・プログラムなどがある。

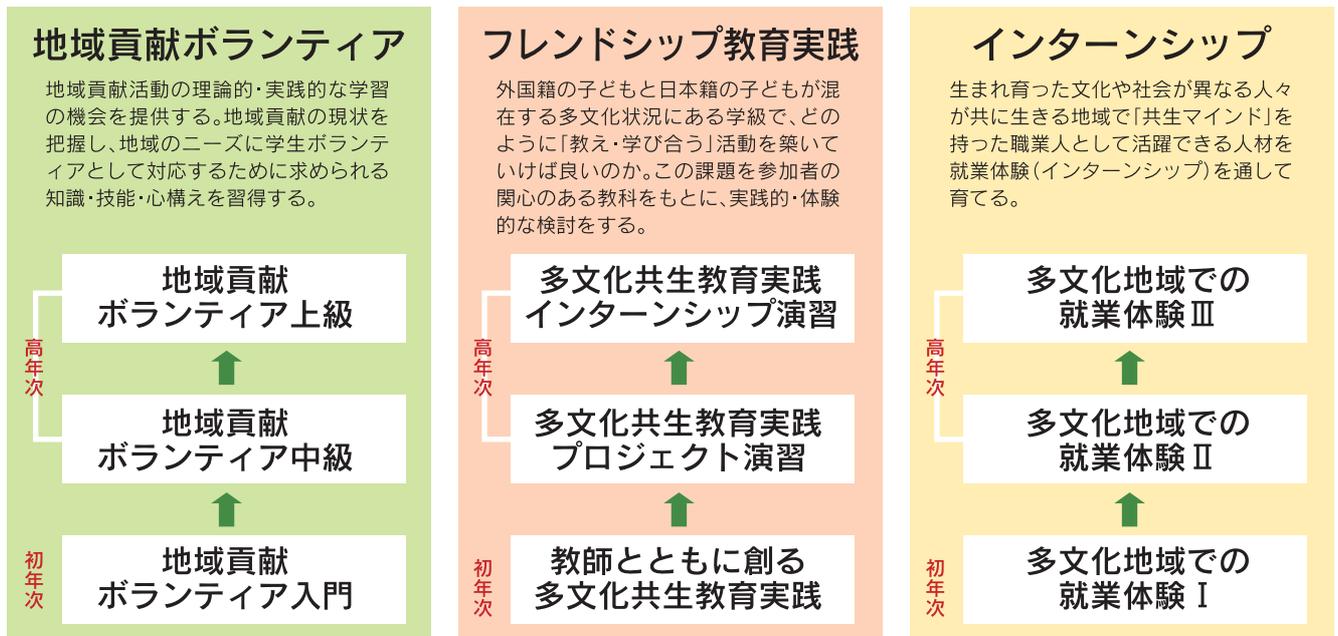
また、コミュニティのニーズを満たすには問題を解決するモデルが必要となる。私たちが開発したモデルCAPRA（カプラ）は汎用性のあるものだと思う。

「C」クライアント（CLIENT）。「A」アナリシス（ANALYSIS）分析。「I」調査、情報収集、法律、政策の見直しなど。「P」パートナーシップ（PARTNERSHIP）。「R」レスポンス（RESPONSE）反応。サービス、プロテクション（安全確保）、実行、予防という4つの戦略がある。最後は「A」アセスメント（ASSESSMENT）評価。進化を続けるにはサービスの質、モニタリング、犯罪のパターン化などの評価は必須だ。CAPRAは、より良い警察官を育てるためのプログラム。警察が効率的に義務を果たし続けるためには常にコミュニティから学び続けること、コミュニティの声を聞き続けること、信頼関係を築くことが重要だと考える。

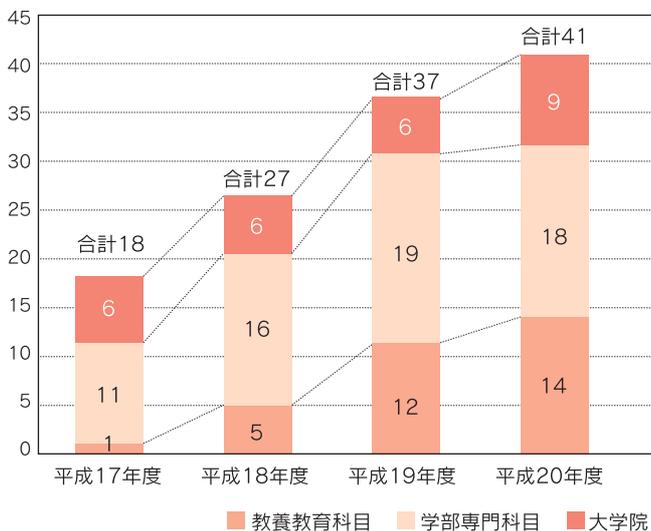
# 多文化共生社会の構築に 貢献する人材の育成

「多文化共生教育・研究プロジェクト」では共生マインドを持つ専門的職業人を育成するカリキュラムの体系化を図っている。その関連授業は「1～2年次の教養教育」「専門教育」「専門教育の実習を終えた高年次での教養教育」という形態で構造化している。平成17年度に18講座だった授業数は年々拡充され、平成20年度には41講座を開講し、4年間で延べ1753人が受講するに至った。

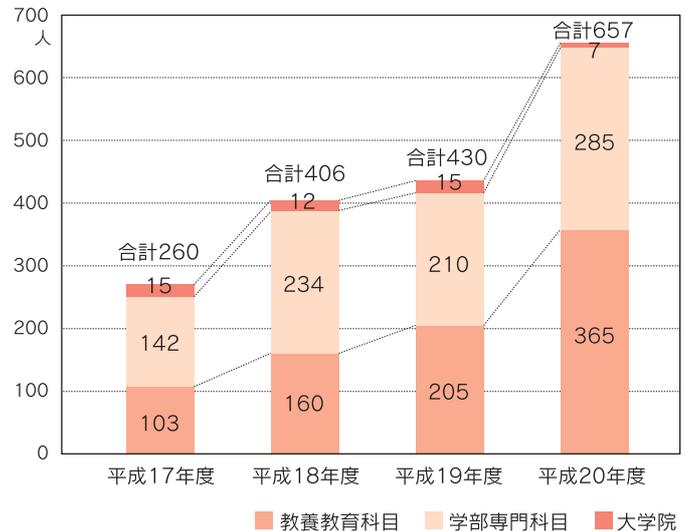
## カリキュラムのステップアップ形式の一部



多文化共生関連授業開講数



多文化共生関連授業・受講者数



## 群馬大学 多文化関連授業 カリキュラム一覧

### 初年次

	授業科目	授業題目名	備考	
1	現代社会と歴史を考察する	学生のための仕事術「多文化共生のまちづくりA」		
2		学生のための仕事術「多文化共生のまちづくりB」	平成20年度より開講	
3	人間理解と多文化共生	多文化共生社会を考える	平成18年度より開講	
4		多文化社会の専門職を考える	(H17は教育学部開放専門科目。H18より教養教育科目)	
5	国際社会と地域社会	地域貢献ボランティア入門A	(H17は教育学部開放専門科目。H18より教養教育科目)	
6		地域貢献ボランティア入門B		
7	国際社会と地域社会	多文化共生のための日本学	平成20年度より開講	
8		多文化共生のためのアジア学	平成19年度より開講	
9		多文化共生のためのブラジル学	(H17は教育学部開放専門科目。H18より教養教育科目)	
10	ポルトガル語	ポルトガル語AⅠ	平成18年度より開講	
11		ポルトガル語AⅡ	平成18年度より開講	
12		ポルトガル語BⅠ	平成18年度より開講	
13		ポルトガル語BⅡ	平成18年度より開講	
14	社会情報学部	情報メディア分野	国際社会リテラシー	平成18年度より開講

### 2年次

1	教養教育	人間理解と多文化共生	多文化地域での就業体験Ⅰ	(H17は教育学部開放専門科目。H18より教養教育科目)
2	教育学部 専門科目	地域郷土研究	地域貢献ボランティア中級A	平成18年度より開講・開放専門科目
3			地域貢献ボランティア中級B	平成18年度より開講・開放専門科目
4		共生・福祉研究	多文化共生時代の教育を考える	平成19年度より開講
5		フレンドシップ教育実践	教師とともに創る多文化共生教育実践	
6	教育学部 専門科目	教育の臨床的研究	多文化学級の臨床社会学的研究Ⅰ	
7			多文化学級の臨床社会学的研究Ⅱ	
8	国際化研究	国際化研究	外国語として日本語を考える	開放専門科目
9			外国語として日本語を教えるために	開放専門科目
10	社会情報学部	情報メディア分野	比較文化論A	(H17、18は比較文化基礎論Ⅰ)
11			比較文化論B	(H17、18は比較文化基礎論Ⅱ)

### 3年次

1	教育学部 専門科目	地域郷土研究	地域貢献ボランティア上級A	平成19年度より開講・開放専門科目
2			地域貢献ボランティア上級B	平成19年度より開講・開放専門科目
3		共生・福祉研究	多文化地域での就業体験(インターンシップ)Ⅱ	平成18年度より開講・開放専門科目
4		フレンドシップ教育実践	多文化共生教育実践プロジェクト演習	
5	医学部保健学科	医学・医療の理解	地域保健医療推進論	平成19年度より開講

### 4年次

1	教育学部 専門科目	共生・福祉研究	多文化地域での就業体験(インターンシップ)Ⅲ	平成19年度より開講・開放専門科目
2		フレンドシップ教育実践	多文化共生教育実践インターンシップ演習	

### 大学院

1	19年度以前 入学生用	異文化教育研究特論	異文化間教育研究特論AB(A:奇数年開講 B:偶数年開講)	
2			多文化共生社会学特論AB(A:奇数年開講 B:偶数年開講)	
3			異文化間教育研究特論演習AB(A:奇数年開講 B:偶数年開講)	
4		院生のための現場再体験	院生のための学校現場再体験	
5			院生のための地域貢献講座	
6			多文化地域での就業体験	
7	20年度 入学生用	共通開設科目	院生のための学校現場再体験	平成20年度より開講
8		共通	多文化共生教育の課題と実践	平成20年度より開講
9		学校運営	多文化共生教育の理論と実践フィールドワーク	平成20年度より開講

\*開放専門科目とは、学部の専門教育科目の中で特に他の学部の学生に開放される科目。教養教育に位置づけられる。

教育カリキュラムの体系化を図っている「多文化共生教育・研究プロジェクト」の中でも、教養教育では、特色ある3つの集中講義を開講している。内なる「多文化共生」という地域課題をグローバルな視点から掘り下げていく。3つの集中講義の授業内容は以下のとおりである。この授業を履修した学生2名にインタビューした。

## 「多文化共生のためのブラジル学」

### 講師

- アンジェロ・イシ氏

### 授業内容

全国的にも急増しているブラジル人住民の文化と社会を、ブラジル人の視点から理解し、多文化共生のあり方を考える。多文化社会ブラジルの地理・歴史・文化を、文献に加え映画・報道・音楽など多様な素材から細解いていく。そのうえで、日本に在住するブラジル人住民の実情と今後の共生のあり方を検討する。



映像で読み解くブラジル社会



教室はいつも満杯状態。ブラジルを多角的に見て考える

## 「多文化共生のためのアジア学」

### 担当教員

- 結城 恵 (教育学部准教授)

### ゲスト講師

- 小林 真嵯恵氏
- 岡 宏氏
- 苫米地 純子氏

### 授業内容

全国的にも急増しているアジア系住民の文化と社会を、アジア系住民の視点から理解し、多文化共生のあり方を考える。アジアの地理・歴史・文化を、文献に加え映画・報道・音楽など多様な素材から細解いていく。そのうえで、日本に在住するアジア系住民の実情と今後の共生のあり方を検討する。平成20年度の講義の中では、社会福祉法人フランシスコの町「あかつきの村」でフィールドワークを行った。



ゲストスピーカーの陳さんと群馬県国際課の山口さん。中国籍住民の視点から多文化共生を考える



ベトナムの特別支援教育施設で学生ボランティア経験をもつ本プロジェクト地域コーディネーターの古手さん。学生の力できることは何かを考える

## 「多文化共生のための日本学」

### 講師

- 落合 延高 (社会情報学部長)
- 砂川 裕一 (社会情報学部教授)
- 竹内 史郎 (教育学部講師)
- 結城 恵 (教育学部准教授)

### 授業内容

グローバル化社会のなかで、われわれは、「日本という国」や「日本人であること」への問い直しに迫られることがある。伝統文化や社会のなかの慣例・慣習のなかに埋め込まれた「日本」あるいは「日本人」像と、多様化・複雑化・高速化する社会変化のなかの「日本」あるいは「日本人」像は、どう影響し合っているのか。グローバル社会のなかの「日本」の持つ多面性を浮き彫りにし、「多文化共生」という新たな課題に対する社会のあり方を探る。



「日本的なもの」を考え抜く4日間。講師の砂川教授



繰り返されるディスカッション。見方・考え方を練り上げる

# 「日本的なるもの」を 考え抜く4日間

4日間各日8時間も講義が行われるという集中講義であるという点にひかれた。講義のポイントは、「日本的なるもの」を歴史や哲学、日本語教育などさまざまな角度から掘り下げていくもの。

結城先生は、「日本的なるもの」を形づくっているものは、学校教育ではないかという。講義内で行われたビデオ討論では、日本の家が、豊が敷かれた古い日本家屋から現代的な家へと変化を遂げた一方、学校の教室の基本形は明治期とほとんど変わらない映像が映し出された。学校教育を受けることで、私たちは日本人へと成長していく。

多文化共生についても、まずは日本人が自分を考える、見つめていくことが原点だ。砂川先生は、「日本的なるもの」を考えるには、日本の哲学について知るべきだという。自分にとって哲学は背伸びしななければならぬ難しい学問。考えを深めるという行為は一人では埋め難いが、グループ発表などを通して意見をまとめるという授業スタイルならそれも可能だと知った。



天笠亮太【医学部医学科1年】

医学科の学生は2年になるとカリキュラムがハードとなり、専門以外にチャレンジするのが難しくなる。今しかできない「多文化共生のための日本学」は、私にとって充実した時間だった。

将来、医者になったとき、患者さんを無意識に傷つけたら、そのくないよう、患者さんの話を聞き正確に理解するには、やはり文化を共有することが必要だと思う。

また、外国人医療の問題、とりわけ不法滞在者に対する医療をどうすべきかが社会問題になっている。不法滞在だからといって治療しなくていいのだろうか？ 多文化共生は、医学を志す者にとっても避けては通れないテーマだと思ふ。

# グループ形式の授業で リーダーシップ感覚を養う

単位が取りやすい授業に傾くという周りの流れに乗りたくはない。「まずは日本を知らない」と多文化共生は始まらない」という授業内容にも大きな興味がわいた。

4日間の授業は、例えば受動態表現は外国語の翻訳語の影響によって変化してきたという竹内史郎先生の研究や口伝口承の文化を貫いてきたアイヌ民族についての落合延孝先生の講義はじめ、すべてが充実し新鮮なものだった。もちろん「日本的なるもの」の源泉を学校教育に求める結城先生の授業も、「個よりも集団」という考え方の中に、学校教育によって人々が組み込まれていくという説明は「なるほど」と思わせてくれた。「改革」によって日本的なものが失われる一方、企業などでは逆行現象が起こりつつあるという指摘も面白い。私は「日本的なるもの」とは、農耕文化に培われてきた柔軟な発想に宿っていると思う。

一番良かったのは、グループごとに意見をまとめて発表する講義形式。授業

参加者らは皆積極的で、モチベーションの高さは大きな刺激となった。医学科からの参加は3人のみだったが、他学部の学生たちと接し考え方の多様性を知ることができたのも楽しい。

私も一度発表を行ったが、議論して到達した内容をまとめあげ、3分間で相手に伝わるよう表現するのはなんと難しいことか！

家族の闘病や死を経験した私にとって、人を助け命にかかわる医師の仕事に就くのが夢。将来医師として能力を発揮するにはリーダーシップが求められるだろう。集団を引っ張っていくために、「ユニケーション能力や人とのかわり方を学ぶ重要性をはっきりと意識することができたのも大きな収穫だ。



石井希和【医学部医学科1年】

# Let's start! 多文化共生

## 特色GPの志を受け継ぐ1・2年生たち

多文化共生を実践し担っていくのは、学生たち。その入り口とも言える授業がある。1年生向け教養教育科目「学生のための仕事術 - 多文化共生のためのまちづくり - 」と、教育学部2年生向け体験的科目「フレンドシップ事業 - 教師とともに創る多文化共生教育実践 - 」だ。学生がチームワークを学ぶ場であり、多文化共生を実践する舞台となる。それぞれ1年間にわたる授業だが履修単位の上限があり、単位とはならなくても授業に参加し続けた学生も少なくない。「熱い学生」の胸の内をのぞいてみよう。

### 【学生のための仕事術】



#### 藤倉良充 (工学部電気電子工学科1年)

年度初めの聴講期間に結城先生が「この授業はすごくつらいから、相当の覚悟が必要」と断言。逆に「それなら、必ず自分のためになるはずだ」と興味を持って受講を決めた。

前橋七夕まつりの「だんべえフェスタ」や国際シンポジウムとして行われた今回の多文化共生シンポジウムでは、**仕事を自分から見つけていくことの大切さ**を体感することができた。それとともに、面白かったのは、最終講義として3回にわたり行われた企画書作成の講義。テーマは「多文化共生のまちづくりをどのように進めるか」というものだった。1組5人のチームに分かれ、ディスカッション、企画書作成、発表、他チームの企画採点など本格的な一連のプランニングワークを経験。僕らのチームの企画は、日本人とブラジル人児童が学校の家庭科教室を借り、お互いの国のお菓子作りで交流を深めるというもの。最初の授業では、焦ってしまい自己紹介すら満足にできなかったのに、最後の発表では、スムーズに発表することができた。先へ進めたという充実感は大きい。

#### 久保田篤志 (工学部電気電子工学科1年)

自分とはとにかく人前でしゃべるのが苦手。「学生のための仕事術」メンバーとして参加した多文化共生シンポジウムでは、なんと僕はパネルディスカッションに参加することに。緊張のあまり質問の意味も分からず、しどろもどろ!とはいえ、授業では発表する機会が多く、少しずつ慣れてきた。社会人になればプレゼンもやらなければならいだろう。**いつかはやらなければいけないことならば、今のうちに経験しない手はない**。シンポジウム発表用のパネルづくりのために、連日深夜に及ぶ作業を行ったことも忘れられない。

もう一つ「仕事術」の醍醐味だいごみといえば、日常生活やほかの授業では経験のできない、一見、大学の講義とは思えないことを経験できる点だ。外国人学校の子もたちと一緒に参加した前橋七夕まつりの「だんべえフェスタ」、国際シンポジウムなどの準備では、夜遅くまでかかって友だちとコミュニケーションを取りつつチームで一つのことを成し遂げることができた。自分の弱点分かり、今後どうやっていけば克服できるのか見通すことができた気がする。

## 浅井美由貴

(教育学部理科専攻2年)

教員研修連続ワークショップは、現場の第一線で働く教師たちの“生の声”を聞けるまたとないチャンス。例えば、そこにあるのは、子どもなりの素朴な科学観に基づく誤解に対して、成長の芽を摘まないように、指導する難しさに煩悶する姿だった。教師という職業が私にとって一気に身近なものに思えた瞬間だ。多文化共生から学んだ“新たな視点”は、教員となってからこそ役立つだろう。

## 松本真一

(教育学部音楽専攻2年)

サブリーダーとして臨んだ“夏だんべえ”。言葉が通じないという不安がある中、練習や本番の予定など※NERや仲間たちとの間に入って調整。ようやく迎えた本番、子どもたちを学校に迎えに行くとき、誰もいない!打ち合わせは十分したつもりだったのに。頭の中は、パニック。トラブルへの対応力も身についた。教育学部の学生にとって**教員以外の目線を学ぶ絶好の機会**。

## 谷口広大

(教育学部英語専攻2年)

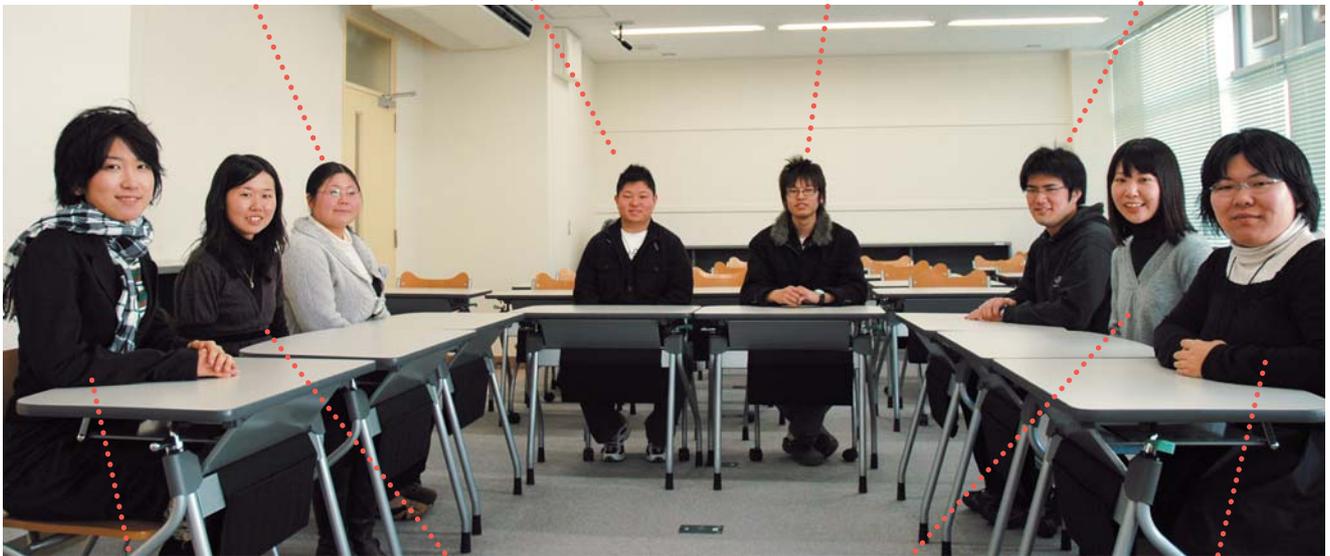
最初あまり積極的でなかった私が、なぜか“まち再発見!”のリーダーに。モチベーションの上まらない私は、結城先生から大目玉をくらい、奮起。当日は、子どもたちの進行状況を考慮しつつ、臨機応変に対応でき、全体を見渡すリーダーとしての経験に達成感でいっぱい。フレンドシップは、修業の場。“**厳しい、苦しい**”の後には、**何ものにも変えられない喜び**、そんなイメージ。

## 森田遼介

(教育学部英語専攻2年)

実はほかの授業の抽選に落ちてしまったので、フレンドシップを選んだ。でも、間違いなく結果オーライ。さまざまに行われるイベントに裏方としてどっぷりと携わることで、**企画力、応用力、そして何よりも忍耐力が、嫌でも身に付いていく**。1年経って、その威力に自分でもびっくり。多文化共生地域で教員をやれるように、もっと自分を鍛えたい。

### 【フレンドシップ】



## 大塚弥生

(教育学部社会専攻2年)

忙しくて充実しているけれど、最初は何のために行動しているのか分からなかった。シンポジウムでPCDCへの評価やその活動の意味を知り、自分の中で1本の線につながった。フレンドシップで学べるものは、単なる異文化理解を超えて、自らと異なる背景を持つ人たちとの協働、そして“伝える”ことの難しさ。**私にとって大切な自分磨きの舞台だ**。

## 野口瑞穂

(教育学部音楽専攻2年)

せっかく群馬大学に入学したのだから、群馬大らしい活動にチャレンジしたい、それならPCDCにどっぷりつかってみようか。そんな気持ちで、“**厳しい、大変**”と評判(?)のフレンドシップを選んだ。実際、学外活動の連続で忙しさのあまりについつい愚痴も。でも、1年経って実感するのは、学生にこれだけ**豊かな体験をさせてくれるプログラムはほかにない!**

## 村田由佳

(教育学部音楽専攻2年)

“夏だんべえ”“秋だんべえ”は最高に楽しかった。普段は地味な私も※NERの児童や仲間たちと2時間ぶっ通してダンスダンスダンス! その裏には、NERに10回近く足を運んだ日々、打ち合わせや練習、鳴子づくり。元気に踊るNERの子どもたちの姿にも感動。裏方を通して、少しずつ見えてきた“**ハウレンソウ(報告・連絡・相談)**”の**大切さや協働の意味を自分の武器にしたい**。

## 稲森稚明

(教育学部音楽専攻2年)

ありきたりだけれど自主性が大切。うっかりしていると、自分がやらなくても、ほかの学生スタッフがいるから企画や運営は自然に流れていく。でも、それでは成長できない。参加した多文化共生インターンシップでは、親の都合や職業にほんろうされる外国人児童や対応の難しさをまさに実感。**目的意識さえ持てば、自分にリターンされるものは決して少なくない**と思う。



Projeto de Pesquisa e Educação em Convivência Multicultural  
Projecto de Investigación y Estudio en Convivencia Multicultural

# PROJECT TOPICS



# 私たちの挑戦は、 際限なく広がっていく。

「多文化共生教育・研究プロジェクト」に参加する学生たちは、講義で学ぶとともにさまざまなテーマに基づいて地域に飛び出していく。そして地域で見つけた課題に対する解決策を協働で見いだしていく。そこで培った共生マインドとコミュニケーション力の結晶を垣間見ることのできる九つの事業を紹介しよう。



野外炊事では協働の学びを実践

地域×人×学び = ボランティア  
ボランティアに必要な力は何だろう？



参加者たちは相互に刺激を与え合い、友情を築き、多くの繋がりを生み出す

地域から学生ボランティア派遣の依頼は近年増加している。しかし、集団での活動の体験不足や、リーダー性に欠ける学生がいるなど課題も多い。ボランティア活動にもっとも必要とされるのは、つながり合う ことで生まれる 人を動かす力・人と動く力。2泊3日の赤城キャンプでは、この力を学び、実践する。

まずPA（プロジェクト・アドベンチャー）では、協働して一つの課題に立ち向かう姿勢を学ぶ。心の壁を取り払うのが、第1段階だ。次は野外炊飯PAで学んだ協働を料理づくりで実践する。

グループワークの基礎力を学んだら、実際の活動に必要な企画力や運営力を養ったための講義を受ける。例えば、

地域から学生ボランティア派遣の依頼は近年増加している。しかし、集団での活動の体験不足や、リーダー性に欠ける学生がいるなど課題も多い。ボランティア活動にもっとも必要とされるのは、つながり合う ことで生まれる 人を動かす力・人と動く力。2泊3日の赤城キャンプでは、この力を学び、実践する。

平成18年度からは、一橋大学のプロジェクト「人間関係キーセッション」とまちづくり授業」に参加する学生と合同で行われてきた赤城キャンプ。

「互いに異なるバックボーンを持つ学生同士が集まって協働することで、切磋琢磨することにもなる。赤城キャンプが、PCCD参加へのきっかけであり、活動を続けられた原動力でもある」と振り返るのは、中山景介さん（教育学部4年）。中山さんと同様、赤城キャンプがPCCDへの導入となるケースも多い。

平成20年度は、(株)リンクアンドモチベーション人材育成プロジェクトマネジャーの榎原洋平氏を講師に迎え、実践的な講義が行われた。

この講義をもとに、グループに分かれ、課題抽出 協働解決というプロセスを経験する。そして企画書づくりとプレゼンテーションを行って締めくく

Vol.1  
赤城キャンプ「地域貢献活動学生協力者養成講座」



必要な役割とは何か。ディスカッションを行いアイデアを出して行く

## 相互理解 + 協働 = 創造

多文化共生のまちづくりを体験する



学生と子どもたちの笑顔あふれるステージ

Vol.2

### 「学生のための仕事術」多文化共生のまちづくり

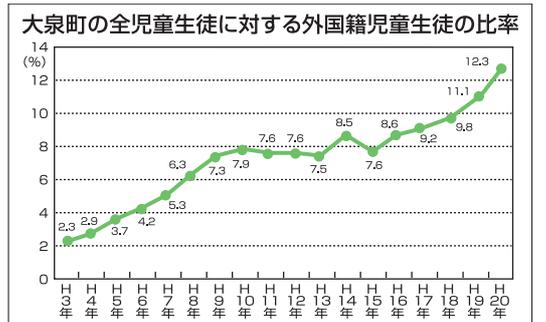
「学生のための仕事術」は、教養教育科目として開講している授業。キャンパスの授業から「まち」へ。その第一歩は、外国人の交流に対するアンケート結果の読み取りだった。見つけ出した課題は、日本人の友人がつくりづらく孤立化する外国人の切実に交流を求める姿だった。

外国人が地域の行事に共に参加できるような場づくりが必要ではないか。外国人と交流し、多文化共生のまちづくりに貢献したい。そんな考えから、学生たちはNER前橋（又クレオ・エドゥカショナル・エ・レクレアチヴォ・マエバシ）と交流。「だんべえ踊り」とブラジルのダンス「フェスタジュニーナ」を融合させて、「だんべえフェスタ」に参加した。そ

の過程を通じて「仕事術」を実践するというわけだ。

まず、必要な役割を付せん紙に書き出し、グループ分け。作業効率アップを図るため、メール等のコミュニケーションツールを利用して協働で作業は進む。だんべえ踊りの創作に関しては、小さな子どもたちでも踊れることを優先し相手の目線に立つて、ブラジルとの習慣の違いにも配慮した。

そして7月13日、イベント当日。初めて会う外国人たちと共にダンス・ダンス・ダンス！「共に考え、行動し、助け合うことで、一体感が生まれた。笑顔あふれるステージを創ることができました」と横山勇気さん、坂真さん（ともに工学部1年）は口をそろえる。言葉が通じなくても、気持ち伝わることを知った瞬間だった。



Vol.3

### 【WS】教員研修連続ワークショップ

大泉町の小中学校教員と大泉町教育委員会、群馬大学教育学部が連携して行うワークショップ形式の教員研修。外国籍児童が急増する学校が日本各地に生まれているが、とりわけ人口の10%以上が外国人という大泉町では、教員らが新しい挑戦に直面していた。互いに異なる文化背景を持つ子どもたちが共に生き生き学ぶには何が 필요한のか。そうした現場の教員らの疑問と課題解決につながる研修を提供しようとして企画されたのが、このワークショップだ。平成12年度から開催を重ねている。

現場で必要な学びは何なのか。教員に対する事前事後アンケートなどを参考に多様な視点から講師陣を決める。PCDCの学生たちは、リーダー、サ

## 人がつながる！学びがつながる！現場につなげる！！

教員とその卵たちが共に学ぶ真夏の暑い3日間！



平成18年度は「のびやかな体と心で、考え・伝える力を育てる」をテーマに開催。落語家の瀧川鯉昇先生の講演に熱心に耳を傾ける参加者たち

フリーダー、受付係、講師係、会場設営係、撮影係など裏方に徹し、協働の在り方を原体験する。「手づくりの学び舎」は、協働の輪をつむぐ場でもある。

平成20年度の事後アンケートでは、「今まで当たり前と捉えていたことを考え直し、多くの角度から意識を向けて子どもたちの声にならない声へと耳を傾けたい」（教員）、「一点だけを見つめるのではなく、もっと広い視野で多文化共生について考え、子どもの声にならない声に気づきたい」（学生）など多様性に対応する力がキーワードとしてあがった。

村田由佳さん（教育学部2年）、猿山恵未さん（教育学部大学院1年）ら将来プロの教員を目指す多くの学生がスタッフとして参加。「自分に足りない要素を見つけ、視野と学びを広げる。多様性を身につけて、将来につなげたい」という。



どうやったら子どもたちに伝えられるのか。活動案をみんなで改善し、築きあげていく

## 未来の教師への第一歩

“教える”ことから“教わる”



終了直後に行われるふりかえりの会。学生たちの意見が飛び交う

「Dosa」は、通称「どさ回り」から、自分たちが考えた活動案を手に、年齢・使用言語・環境など十人十色の子どもたちが集う現場を回り教育実践を積む1年間のプロジェクト。多文化共生教育を初めて実践する学びの場でもある。主体となる教育学部2年生が一つのチームになって、相互にぶつかり合って鍛錬する。活動の場となるのは、大泉町や伊勢崎市の保育園・児童館・外国人学校・図書館など。訪問先で出会う人々に楽しんでもらうために、活動案をみんなで考え抜く。相手の年齢や母国語が違えば、伝え方や指導法も変える必要があるから、一筋縄ではいかない。

数々の失敗を繰り返すうちに、学

Vol.4  
Dosaに【多文化共生教育実践巡回プロジェクト】

生たちは百戦錬磨の対応力を身につける。実践後は、記憶が鮮明なその日のうちにふりかえりの会を開いて、相手に見える力、かわる側の視点、子どもを惹きつける力など改善が必要な点を洗い出し、次の実践に生かす。「一つのプロジェクトを長時間かけてみんなで築き上げることで信頼感が生まれる」と金井大季さん（教育学部4年）。

これまで「おはなしがつながら、おはなしてつながら」（平成16年度）、「協力を伝える」（平成17年度）、「美しくのびやかな日本語を話そう」（平成18年度）など毎年さまざまなテーマで実施

「Dosaで身につけられる柔軟さや対応力は、通常の講義では学べないもの。Dosaは未来につながっている」と木村曜子さん（教育学部4年）は語る。



雨が降る中、元気いっぱいカメラを持ち、まちへ飛び出した

## 目線を変えると新しい世界

まなざしの数だけ世界はあった！



子どもたちひとりひとりの目線のおもしろさが光る瞬間

子どもたちが持つ多くのまなざし。まなざしの数だけ世界があるので、それを子どもたちとともに感じてみたい。そんな思いから、「まち再発見！」プロジェクトは、ブラジル人学校生徒や日本人の子どもたちとともに大泉のまちに飛び出した。

カメラを握りしめた子どもたちは、好奇心いっぱいにフラインダーをのぞいた。普段見慣れない日本文化に新鮮な興味を持つブラジル人の子どもたちだ。

子どもたちが持つ多くのまなざし。まなざしの数だけ世界があるので、それを子どもたちとともに感じてみたい。そんな思いから、「まち再発見！」プロジェクトは、ブラジル人学校生徒や日本人の子どもたちとともに大泉のまちに飛び出した。

Vol.5  
まち再発見！

「ワンダーアイズプロジェクト、大泉町と群馬大学の共催による写真教室プログラム「まち再発見！」。ワンダーアイズプロジェクトとは、世界の子どもたちを対象に、写真を通して教育・文化活動を行い、異なる価値観や社会の理解を相互に深めるといふものだ。

「子どもたちが持つ多くのまなざし。まなざしの数だけ世界があるので、それを子どもたちとともに感じてみたい。そんな思いから、「まち再発見！」プロジェクトは、ブラジル人学校生徒や日本人の子どもたちとともに大泉のまちに飛び出した。」

「学生たちは安全性に配慮したポルトガル語マップを作成。また、被写体をどのような心情で捉えたのか、子どもたちに気づかせるよつフレイムづくりや発表の手伝いをした。

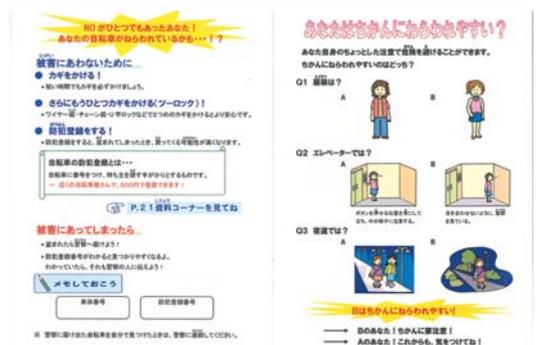
『「こんなあった？」』『何で撮ったの？』写真に対する驚きを子どもたちにぶつけて感想を聞くと、被写体に愛着がわいてくる。『子どもたちと同じ視点に立って』と河内亜沙美さん（教育学部2年）。松本真一さん（教育学部2年）は、「言葉という壁があっても、写真が心を通わせてくれた」と話す。

まち再発見は、子どもたちと地域の交流やまちの活性化だけでなく、学生たちの新しい視点の再発見にもなった。



配布した防犯マニュアルを熱心に読む子どもたち

## ただいま親子の安全レシピ配信中 「安全を探し求めて」



完成まで何度も修正を加え、多くの人へ伝わる防犯マニュアルとなるよう工夫した

Vol.6

### アレルタ 【防犯活動】

アレルタは、防犯活動を行うチーム。群馬県警察本部との協働で、平成19年に編集・発行した『子どもと保護者のための防犯マニュアル』（日本語版・ポルトガル語版）は画期的なものだった。

県警職員らと編集方針をめぐって頭を悩ませることからマニュアルづくりはスタート。

ブラジルの法律には飲酒・喫煙の年齢制限がない！50CCバイクに免許はいらない！そんな驚きの連続から、日本のルールを一方的に教えるのではなく、相手国の常識を理解し、配慮したマニュアルづくりの必要性に気がついた。

製作に当たっては、外国籍児童生徒の家庭への事前アンケートを実施し、非行問題や薬物、痴漢など特に保護者

が心配していることを把握した上で誌面構成を考え、編集過程では、外国人学校など多くの人々に査読してもらい、外国籍の人々に分かりやすい表現を妥協することなく追求した。

こうして完成したマニュアル。その特徴は文化の違いに配慮し、ふりがなつき、クイズ形式、実用性重視、罰則名を明記、ふんだんなイラスト使用、親子の対話形式、用語説明など。伝える工夫が随所に施された防犯マニュアルとなった。

完成したマニュアルは、外国人学校で劇やクイズなどを交え配布した。「防犯意識を広めていきたい」と意欲を語るのは、飯島芳洋さん（教育学部4年）。一方、黒澤朝子さん（教育学部4年）は、アメリカでロサンゼルス市警察本部の取り組みを視察してきた。「地域の人々と協働する警察のあり方は、教師としても生かしていける」と述べた。

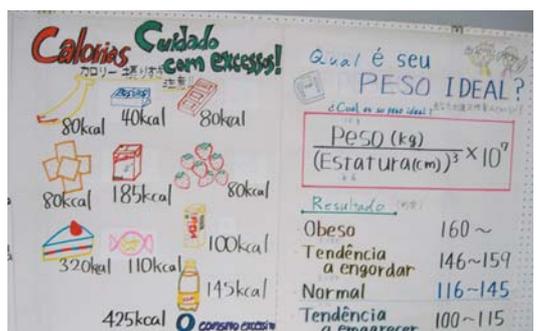
Vol.7

### 外国人学校等 健康診断会・相談会



健康相談会では、一人ひとり丁寧に健康診断の結果を説明していく

## 子どもたちの健康を守る活動の必要性 できることから取り組み活動の輪を広げる



会場では、子どもたちがわかりやすいポスターを貼り、健康への関心を持ってもらうようになっている

日本の学齢期の子どもたちなら誰もが学校で受ける健康診断。実は、外国人学校の子どもたちにとっては当たり前ではない。外国人学校は、学校保健法の枠から外れてしまっているからだ。同じ日本に暮らしながらも通う学校によって必要な保健サービスを受けられない現状がある。

子どもたちの健康を守るためにできることから始めよう。そんな思いから、「多文化共生教育・研究プロジェクト」では、医学部を中心にすべての学部が協力をして平成14年度、在日ベール人・ブラジル人学校に通う児童・生徒を対象に日本人とほぼ同内容の健康診断、相談会をスタート。発育状況や子どもたちの

健康状態の把握、医療面・生活面に対する適切な指導、保護者の健康意識向上などをはかる。

群馬大学に加えて、県の保健福祉事務所、伊勢崎市・太田市・大泉町等の協働実施体制も充実が進み、平成20年度で7回目を迎える。過去6年間で実人数約1300人、延べ2400人が健診を受けた。この6年間で、外国籍児童・生徒とその親、教員の健康に対する意識は大きく向上したという。

「健康診断から健康相談会まで一連の流れを子どもたちにとって楽しく興味深いものにする中で、健康に関心を持ってもらうきっかけにする。生まれた地域・文化に関係なく、子どもたちがこの国で健康に暮らせる大切さを知った」と実感するのは、1年生から参加を続ける笹沢優貴さん（保健学科3年）。



図書館で開設している「多言語サロン」での実習の様子。多文化の現場で実践的に学んでいく

## 働く現場から学ぶ

目指す職業に共生マインドを生かせ



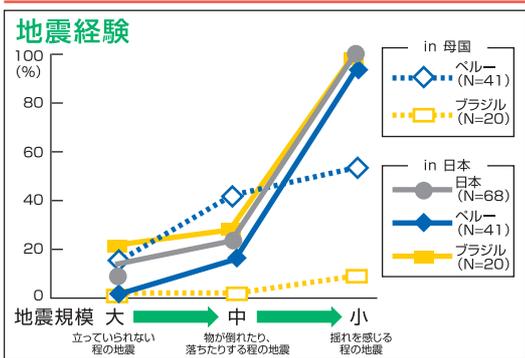
小学校では日本語学級の学習補助を体験。教える・学ぶ関係の中にも多くを発見する



防災訓練では、母国での地震体験の少ない外国籍児童が地震体験をする

## 協働で築く地域防災

伝え合い・助け合う防災を考える



Vol.8  
多文化共生インターンシップ

通常の教育実習では多文化学級を体験することはできない。もしも、学生が多文化地域に教員として配属されたらどうなるのか。この課題を解決するため大泉町と群馬大学の強い信頼関係から生まれたのが、多文化共生インターンシップだ。

外国人が当たり前前にいる職場でのインターンシップは極めて画期的なもの。希望によっては、異業種体験ができることも大きな特色の一つだ。

多文化共生教育・研究プロジェクトで一年以上トレーニングを積み、多文化共生の基本的な知識を有する学生だけが参加を許される。大泉まで毎日2時間かけて通う学生、町内に泊まり込んで実習に打ち込んだ学生…。インターンシップ生は意欲的にチャレンジした。

インターンシップという場で学んだ

共生マインドは、卒業後、働く現場に出てから次第に見えてくることが多い。多くの卒業生が語るように。

参加した三添愛実さん(教育学部2年)は「外国籍児童の中には日本語を学ぶ意味を理解できていない子が多い。教師は、子どもたちの相互作用の中で理解させるよう働きかけることが必要なのではないか。そのためには、教師として集団を育てる力が必要だと痛感した」という。稲森雅明さん(教育学部2年)が感じたことは、「日本語学級にはさまざまな違いを持った子どもが集まる。その中で、楽しく日本語を教えるためにリズムカルに文章を読んだり、ゲームを取り入れたりという工夫をしていた。やる気を引き出す実践的な方法は、外国籍の子どもだけでなく、苦手科目のある子どもも苦手意識克服にも活用できるのではと感じた」。インターンシップで学んだ事は、今後現場でいかされていく。

Vol.9  
防災

ブラジルにはほとんど地震が発生しない。一方、ベルーでは日本よりも地震が多く発生する。各国の地震体験が日本とまったく違うのは、「いざ」という時、大きな被害につながってしまうことも考えられる。また、外国籍住民の多くが「避難勧告などの災害情報が分からない」「避難方法などの対応の仕方が分からない」という問題を抱えている。

こうした中、まず防災に対する生の声をきこうと、チーム「アーク」での活動をもとに結城恵准教授と共同研究を行ったのが、根岸孝明さん(平成19年度大学院工学研究科卒業)。「多文化地域における防災意識の実態と防災教育のあり方に関する一考察」では、伊勢崎市内にある公立小中学校に在籍する児童・生徒とその親を

対象に防災意識に関するアンケート調査を実施した。

日本、ブラジル、ベルーと属性を分けた調査結果からつかえるのは、外国籍住民を言語の違いからだけでなく、出生国の災害リスクやそれに備えた教育の在り方を踏まえた対策を検討する必要があるというものだった。

PCDCでは、工学部生が中心となって、行政、外国籍住民、他学部学生と協働し、さまざまな活動を行ってきた。

大泉町とワークショップを共催し、多文化共生シンポジウムでは多文化地域の防災について意見交換、防災ガイドブックの作成・配布を行ったこともある。毎年開催される大泉町主催の防災訓練には企画段階から参加している。大切なのは、背景の異なる人々の視点、地域との協働による地域防災だ。

# 群馬大学における PCDCのインパクト

「多文化共生教育・研究プロジェクト」が始まって10年、特色GPに採択されて4年。プロジェクトは教育、医療、防災、安全・安心のまちづくり、地域コミュニティの活性化など全学に及ぶ大規模プロジェクトに成長した。学内におけるインパクトと、今後の可能性を検証してみよう。



「PCDCは教員同士が協働で研究を始めるきっかけにもなった」と話す結城恵准教授

**PCDCによって、コミュニケーションスキルがクローズアップされた**

**結城** 群馬大学内部で「多文化共生教育・研究プロジェクト」の取り組みが、それぞれの専門分野の中でどういったインパクトがあったか振り返ってみよう。

**福地** 私の専門はスポーツの歴史研

【参加者】  
司会：結城恵  
(PCDC推進責任者・群馬大学教育学部准教授)  
福地豊樹  
(群馬大学教育学部教授)  
落合延高  
(群馬大学社会情報学部長)  
田村遵一  
(群馬大学医学部附属病院総合診療部長)  
佐藤由美  
(群馬大学医学部保健学科教授)  
片田敏孝  
(群馬大学大学院工学研究科教授)

**落合** 社会情報学部の卒業生は、会社員、銀行員、SE、公務員、警察官など実に多様な職種に就く。このプロジェクトの特徴は、本を読むだけでなく地域に実際に出て行って、現実の課題を考えながら協働でまとめていくこと。そういう中で培った能力は、今後の教育の財産になっていくだろう。そんな中、卒論で「多文化」を探り上げた学生も数多い。

**研究** 教育学部専門科目の授業「多文化共生時代の教育を考える」では、リマ・ウイルソンさんにカポエイラを体験してもらおうという公開授業を実施した。スポーツといえば欧米で成立した近代スポーツしか知らない人が多い。カポエイラのようなメキシコストリームではないスポーツに触れ、その歴史的背景を知った上で子どもたちに教育できる機会が拡大したことはインパクトが大きい。



「カポエイラを授業で体験できたことが最大のインパクト」と語る福地豊樹教授

**結城** 本学の学生はまさに「書を持って街に出て、街へ出てまた書に戻る」といった感覚がある。

**田村** 私は、主として外国人学校の健康診断に参加した。最近では地域医療、チーム医療などに関心が高まり、学生の見る目も変わってきた。医学部の学生や卒業生が社会に対峙する気運が高まりつつあるという意味で大きなインパクトがあったと思う。

**佐藤** 健康診断を受けられない外国人学校の子どもの存在を結城先生に出会って初めて知った。何かできることはないかと考えて始めた事が健康診断で、地域保健活動そのものだった。健診では、スタッフとなる学生たちに「正確、安全、快適」を合言葉にプロとして自分で考え行動するよう指導している。私自身も毎年、健診から多くのことを学ばせていただいている。

**片田** 防災の世界では、文化が違えば命の価値が異なる現実がある。直面することがある。自分たちの価値観を現地に持ち込んで通用しない。防災問題は文化が違えば命の価値が異なる現実がある。直面することがある。自分たちの価値観を現地に持ち込んで通用しない。防災問題は



「1年目の健康診断を受けた生徒は、対象者のうちわずか3割に過ぎなかった」と振り返る佐藤由美教授

多文化問題そのもの。工学部全体として考えても、エンジニアにとって最高の製造品が、実は世の中で何の意味も持たないことだって珍しくない。ニーズを理解した上で送り出さなければ売れない。そう考えると、防災でも工学でも多文化理解やコミュニケーション能力がキーワードになるはず。

地域を巻き込む全学横断的なセンター構想

結城 この4年間に約40ほどの新しい授業が生まれた。平成20年度には「多文化共生のための日本語」「多文化共生のためのフラジル学」「多文化共生のためのアジア学」という連続3シリーズの授業を集中講義として開講。すると、3シリーズすべて選択するという医学科の学生も少なくなかった。今後、医学教育の中では多文化共生とい

う視点が教育改革論の中でどう位置づけられていくのだろう？

田村 医師は共生マインドがないとまったく太刀打ちできない仕事。カリキュラムの改訂はもちろんだが、大学全体でコミュニケーションをきっちりと教育するシステム。多文化教育人材センター。を創った方がいいのでは？ 群馬大学にはPCDCという取り組みもあって、人材やノウハウも蓄積されている。

片田 社会に貢献、役立つ学問としてアカデミズムのレベルアップとともにコミュニケーションスキル的重要性にみんなが気づいた。全学挙げてもう一段高いレベルでシステム化し、群馬大学のアピールポイントにすべきだと思う。

佐藤 私も賛成。センター構想の中で、それぞれの専門の立場から「もっとこうやれば」という部分を検討し合っていけば、学部教育自体がもっと充実していくはず。

福地 今まででは学生たちがプロジェクトにかかわる一方、どうカリキュラムに位置づけられるのかわからなかったと思う。文化理解やコミュニケーションスキルを全学的に拡大して取り組むべき。地域の教員養成という視点からも、群馬大学らしさの重要なポイントになるのではないだろうか。

落合 あまり難しく考えないで、学



「問題解決能力のある市民を育成するPCDCは、今後の大学教育を考えるプロジェクト」と語る落合延高教授

部横断的なセンターを作る必要があります。そこで議論をまとめ、学部にはフィードバックする。それが共通教育という形で定着するには最良の方法だと思つた。

結城 多文化共生は大学の中だけでは完結できない。地域に出ている中で、いろいろな学びがある。地域との連携の中で、大学のあり方を再考することは？

福地 教育学部から警察官になる人が増えつつある。教育のことを考えるとき、多文化はもちろんだが、携帯電話・インターネット問題などで警察と連携して子どもたちの安全を守る必要も生まれる。教育のテーマとしても大きな課題。

片田 例えば、私がかかわる防災工学は、救急救命、保健、医療、防災教育、災害情報、行政、福祉……ほとんどあらゆる分野と連携が



「センター」は学内だけでなく、さまざまな人を巻き込んで全国規模でやるべき」と構想する田村道一郎

必要なジャンル。全学、そして地域を巻き込んで協働で立ち上げていくことが理想。

結城 地域・生活に根差した多文化共生問題には大学教員だけでは分らないことがたくさんある。大学内だけでなく、行政職員、学校関係者、警察……など地域と連携した協働性の高い人材育成センターが理想だと思つている。



「防災工学は生死の問題に直面する総合科学ではないか」と考える片田敬孝教授

# 群馬大学モデルの社会へのインパクトと期待

「多文化共生教育・研究プロジェクト」は、地域社会に対しても大きな影響を及ぼしてきた。ここでは、高等教育、多文化社会を擁する行政などに群馬大学モデルが与えたインパクトに迫ってみたい。



伊藤彰浩氏  
名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授

どこでも通用する「学士力」に見事に当てはまる群馬大学モデル

特色GPの採択に関わっている、採択後にエネルギーが低下していつてしまうプロジェクトが、目立つことに気づく。社会との連携というカテゴリの中で採択された群馬大学P CDCの取組みで特徴的なのは、教育プログラムがほとんど充実している点。現在、年間41講座開講の点とだが、驚くべき数字で突出したプログラムと言える。非常によくできたサービスラーニング。今後は、大学としてのカリキュラムポリシーの中にどうきっちり位置づけしていくかが鍵になる。

いま中央教育審議会が作成中の「学士課程教育の再構築に関する答申」では、学士力というキーワードが注目を集めている。どこでも通用するような汎用的な能力を明確にしたものだ。その中には、このプロジェクトの目標でもある課題抽出力、協働解決力、提言実践力が見事に当てはまっている。群馬大学はかなり有利な位置にいますと、言ってもよいのではないが。

大学教育すべての領域に組み込む必要のある群馬大学モデル

現場生成型教育という点では、群馬大学と一橋大学は同様な問題を抱えているのかもしれない。一橋大学の取組みは、「人間環境キーステーション」とまちづくり授業。商店街に増えた空店舗に新たな息吹を吹き込もうと、自治体や商店会と組んでコミュニティカフェ、地場野菜の販売、まちかど教室などを企画運営。運営は学生が主体的に行う。地域の交流拠点と大学の中のまちづくり授業を車の両輪のように、現場に出ては戻ってというサイクルで展開した。学生がグループをつくって地域と連携し、社会人基礎力が求められる点は共通したものだ。

群馬大学にはセンター構想があると聞いた。組織を支える理念を上位に位置づけて、すべての学生が多文化共生マインドを持つような教育が、21世紀の日本社会、世界市民として自己を形成していくのに不可欠なのではないだろうか。それが群馬大学モデルだとしたら、ぜひ一橋大学も取入れたい。



榎原洋平氏  
株式会社リンクアンドモチベーション エントリーマネジメント事業本部人材育成プロジェクトマネジャー

日本のコミュニケーション教育の先端に位置する教育モデル

群馬大学モデルのインパクトは大きいし、今後ますますその力は発揮されるだろうと考えている。自分の文脈と違う人たちと様々なコラボレーションする多文化共生は、社会で求められるコミュニケーション力を培うという部分でまさに理想的。企業自身が多文化になりマネジメントできる人材が求められる中、群馬大学の取組みは非常に有意義ではないだろうか。今後は、自分自身の軸を確立することが教育上の一つのポイントになる。また、活動の型ができ上がる一方で、常に新しいチャレンジができるようなプログラムづくりも重要だ。

早い段階でコミュニケーションの方法を徹底的に学ぶ機会を持つことは、いま社会から切実に求められている。そういう人材を社会に送り出していくことで群馬大学のパフォーマンスはアップしていくだろう。センター構想を実現させて、日本におけるコミュニケーション教育の先端モデルになってほしい。



林大樹氏  
一橋大学大学院社会科学研究科教授

人々の痛みを理解する、地に足のついた多文化共生教育

ブラジル人の子どもたちを日伯両国にとって大切な人材として育成しようという発想の下、教育文化交流として出来ることはないかと模索中だ。結城先生が平成17年度から始めた「外国人学校の現状に関する調査」が、日本の行政施策を立案する上で唯一のデータ。実証調査研究を背景に、地に足のついた形で多文化共生教育を展開していると感じる。

人々の痛み、相手の気持ちを考えながら施策を考えることが大切だと思う。あるブラジル人学校では、不況の影響で平成20年4〜11月の間に30%の生徒が退学してしまった。胸が痛むが、行政の対応には妥当性や公平性が求められる。税金を使うにあたっては、納税者から見ても妥当な方法が求められる。今後は調査研究という形で群馬大学がやっているような健康診断を全国で実施できないかと検討しているところである。



芝田政之氏  
文部科学省大臣官房国際課長



山口和美氏  
群馬県生活文化部国際課長

社会のあり方、生き方を考える多文化共生マインドの重要性

地方の国際化が叫ばれて約20年、県行政のグローバル化への対応は大きな課題となっている。多文化共生が私たちの進めるグローバル対応のスタンス。多文化共生は移民政策とは異なると考えている。多文化共生は、一人ひとりが生き方、社会のあり方、どういふ人材が求められるかを考えることではないだろうか？そういう意味で群馬大学が共生マインドを持つ人材を育てたことは大きなインパクトがあるのではないだろうか。今後もぶれることなく人材育成を続けて欲しい。

行政の大きな役割の一つは、システムづくり。例えば、外国人学校への健康診断も群馬大学に頼りつきりになるだけではなく、システム化していかないと継続が困難になる。もう一つは、地域社会の中で活躍できるように環境づくり、人づくり。グローバル化に対応した人材育成は行政にとっても最重要問題の一つ。だから、行政がPCDCに関わることに大きな意義がある。

多文化共生とは何だろうか？自分なりの切り口を持って

多文化共生マインドとは何だろうか。私は文化の壁を越えることだと考える。そのためには、世界基準の意識を持つことが大切だ。それはちよつと言いつ過ぎだと思えば、自立と言いつ換えてもいい。精神的な意味での自立とは、自分の軸、自分なりの物の見方、切り口を持つということ。それが、多文化共生マインドだ。

では、マイノリティに対してマジヨリティとしてどう対応すべきなのか。そのために必要なことは、内なる多文化共生の積み重ね。いま日本の子どもたちは、人間関係つづれない症候群。それは、隣人との違いを乗り越える訓練が日常的に不足しているから。教師に求められているのは、異なる考えの子どもたちを超越する指導力、また超えられない時の対応力。大泉西中で5年間校長としてブラジル人児童と接する中で、子どもを心で解放する指導こそが問われていると気づいた。PCDCの学生さんたちには、日常的に違いを乗り越える喜びをぜひとも学んで欲しい。



登坂利彦氏  
大泉町教育委員会教育長



二宮正人氏  
サンパウロ大学法学部教授 / CIATE国外就労者情報支援センター理事長

きっかけはPCDC、サンパウロ大学と群馬大学が協定締結

「勇将の下に弱卒なし」という言葉通り、PCDCの学生たちが携わるプロジェクトは、それぞれが素晴らしい甲乙つけがたい。とりわけ健康診断にはブラジルにおける日系社会のメンバーの一人として感謝している。結城先生とおつき合いがきっかけで、サンパウロ大と群馬大学との間に協定を結ぶことが決定した。群馬大学からの留学生に学費を免除し宿舎を用意できるようになる。協定により、生のポルトガル語を学ぶ機会が増えるはずだ。

私は5歳で家族とともにブラジルを訪れ、日本の国費留学生として来日、6年学んだ。何らかの形でお返ししたいと思い、日伯関係に役立つと尽力してきた。PCDCには有能な人材が予備軍として数多い。Act locally, think globally という旗印にも納得。「国際化だから世界に羽ばたけ」というスローガンが主流だったが、地域社会に役立つ人材養成は必要。そのお手伝いをしたい。



# 共生マインドという志を持って飛び立つ

プロジェクト責任者・結城恵准教授

10年間で築いた最も大切なものとは

平成10年度から始まった「多文化共生教育・研究プロジェクト」。その初期は、小さな川の上を、一研究室のメンバーが方向が見えないままにただひたすら小舟でこいでいた、そんな気がします。それが、この10年間に、本学の全ての学部の先生方や職員の皆さんと力をあわせることで、方向を見定め、大きな川を進むことができるようになりました。地域の皆さんがともにオールをこいで下さることで、広くて深い大河に向かう勇氣をもつことができました。そして、若い学生たちの力が加わることにより、流れが穏やかな時も荒れるときも信念を持ってしっかりと舟をこぎ続けることができました。気がつく、「私たち」と呼べる仲間に、国籍もジェンダーも年齢も職業も多様



な広がりがありました。そして「私たち」の間にお互いが必要で信頼できる存在であるという思いが生まれていました。この10年間で最も大切なこと、誇りに思えることとはこの志「共生マインド」が着実に私たちの間に生まれたことです。本プロジェクトの推進の過程で、この志を育て、共有して下さった全ての皆様に心より感謝申し上げます。

## 共生マインドの志を伝え続ける使命

平成17年度から始まった特色GPは平成20年度で終了しますが、共生マインドという「志」を伝えていくことは今後も群馬大学の責務であると思っています。

現在の経済や社会の状況は、いつ、どのように変化するかわかりませんが、変化が大きければ大きいほど、人がどのような志をもてるのか、人と人とがどれだけ歩み寄り、共に歩こうとする思いをもてるか、が問われると思います。どんな経済変化や政治転換が起ころうとも、大切なのは人が人として尊厳をもって生きること、伝え合い、理解し合い、わかち合うこと、共



に生きていこうと希望を持ち続けること。その「志」さえしっかりと持っていれば、よりよい実践や施策は必ず創り出せると思います。

群馬大学で時間をかけて生まれ育った、この共生マインドという「志」を損なうことなく次に続く人たちにつなぎ、育てていくことを切に願っています。みなさまとともに、これからも力強く多文化共生という大海原を渡っていきたく、渡り続けたいと思っております。今後ともどうかよろしくお願い申し上げます。



# 私たちのメッセージ「共に生きる 青い星」



「共に生きる青い星」が合唱曲に！

プロジェクトのイベント準備に追われていた平成14年のある日、結城恵准教授の長女・瞳ジーナさん（当時・小2）が大学の教室の片隅で描いていたのが、地球にさまざまな人や動物が手をつないでいる絵だった。この絵に詩を書いたくれたのが矢内一雄・前伊勢崎市長。以来、この絵と詩はPCDCのシンボルとなった。

そして、平成20年、群馬大学教育学部音楽教育講座の西田直嗣准教授が作曲・編曲を担当してこの詩が合唱曲に。11月30日、「群馬大学第9回多文化共生シンポジウム」のラストで、この合唱曲が奏

君、いまどこにいるの？  
地球の上だよ  
君と同じ星の上だよ  
メダカもクジラも  
猫も象も  
草も木も  
みんな いっしょだよ  
泣くも笑うも いっしょだよ  
共に生きる 青い星

詩：矢内 一雄（前伊勢崎市長） 絵：結城 瞳ジーナ（当時 小2）  
Copyright©2002-2009 Gunma University



詩を朗読する結城瞳ジーナさん

表された。西田准教授自ら指揮を担当し、合唱には教育学部音楽専攻学生とPCDCの学生・教職員が参加。合唱曲は日本語・ポルトガル語・英語の3カ国語バージョンという構成だ。PCDCにまた新たなシンボルが誕生した。



西田准教授の指揮のもと、総勢50名による迫力ある歌声が披露された



群馬大学  
「多文化共生教育・研究プロジェクト」



だんべえフェスタ2008にて

編集後記

「自分は、学生時代なんと緩く怠惰な日々を送ってしまったのだろう」。PCDCにかかわる学生たちの姿を見ると、そう恥じ入るばかりだ。おそらくPCDCに参加していなければ、周囲と協働して課題を見つけ解決していく力を身に付けるチャンスは、そう多くはない。サークルや遊びに熱中して自分を見つめる機会もないままに、就職活動、卒業を迎える学生が多いのではないだろうか。モラトリアム期間がかつてより相当に延びた日本だが、今や社会はそれほど甘くはない。PCDCでむち打たれ汗かいた分だけ、成長できるに違いない。「苦しい」の積み重ねがやがて、自信につながっていくはずである。確信に満ちた表情で、自らの考えを明確に言うことができるPCDCで活動を続けた上級生たちの姿。そして卒業生らは、「PCDCがあったからこそ今の自分がある」と口をそろえる。特色GPとしての4年間は終わるが、PCDCの活動はこれからも続いていく。そんなPCDCに迷いなく飛び込んでみないか。「多文化共生」を通して、社会が大学に求める多くの力を身に付けられる最適なプロジェクトである。(ライター・磯尚義)

**OBRIDGE**  
(オブリッジ)とは…

オブリガード      ブリッジ  
ポルトガル語で「ありがとう」の**Obrigado**と「橋」の**Bridge**を掛け  
合わせて「ありがとうの架け橋」という意味を込めてつくった造語です。

■発行:群馬大学「多文化共生教育・研究プロジェクト」推進室    ■住所 〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町四丁目2番地  
■Tel./Fax. 027-220-7382    ■E-Mail [pcdc@edu.gunma-u.ac.jp](mailto:pcdc@edu.gunma-u.ac.jp)    ■URL <http://tabunka.jimu.gunma-u.ac.jp/>

©群馬大学 本誌からの無断転載、コピーを禁じます。